

敏腕弁護士はお熱いのが好き

第一話

「いらつしやいませ」

がらがらとガラス戸を開く音が店内に鳴り響き、お客の入店を知らせる。

直後、店主である栗原美羽は元気に挨拶をした。

そんな美羽を見ると、暖簾をくぐった客は顔を綻ばせ、慣れた様子で馴染みの席に腰を下ろす。

ここは「名前のない定食屋」という、少し変わった名前のこぢんまりとした定食屋だ。

店内には四人掛けのテーブル席が二つと、カウンター席が二つのみ。

美羽は二十歳という若さで、一人でこの店を切り盛りしている。

元々、ここは美羽の祖母が経営していた店だった。

両親を早くに事故で亡くして以来、美羽はずっと店の二階で祖母と二人暮らしをしてきた。

だがその祖母も、今から二年前に他界してしまい――

十代にして天涯孤独の身となった美羽はしばらくの間、ただ無気力に日々を過ごしていた。

そんな美羽を救ってくれたのは他でもない、この店の常連客たち。

幼い頃から店を手伝っていた美羽は、彼らと自然に顔見知りになっていた。

そのため、気落ちする美羽を心配し、彼らは毎日のように店を訪れてくれたのだ。彼らの思いを無下にするわけにはいかない。

当初はその気持ちだけで無理をして笑みを作っていた美羽も、彼らの優しさに触れる内に少しずつ本当の笑顔を取り戻していった。

祖母を大切に思っていてくれた、そして自分を気遣ってくれた人たちの憩いの場である定食屋を続けたい。

いつの頃からか、美羽は自然にそう願うようになっていた。

それをただの夢で終わらせないために、高校を卒業すると同時に調理師専門学校に入学。

一年で免許を取得し、今から一ヶ月程前によくこの店を再開することができたのだ。

今しがた入店した初老の男性も、店の再開を心待ちにしていた常連客の一人だった。

「高木のおじいちゃん、今日も来てくれてありがとう」

ポニーテールにした長い黒髪。

大きなこげ茶色の瞳に、少し丸い顔の輪郭。

実年齢よりも幼さを感じさせる容姿のせいか、店の常連客たちは皆、美羽を娘や孫のように可愛がってくれた。

赤いチェックの三角巾とお揃いのエプロンを身に着けた美羽は、その一人である高木にお茶を手渡す。

「美羽ちゃんが元気に頑張っている姿を見ながら、美味しい飯を食う。これ以上の贅沢はないな」

「そんなに褒めてもらっても、料理は変わりませんよ」

過ぎた賞賛に照れ笑いを返し、美羽はほっけの塩焼き定食をカウンターに座る高木の前に差し出した。

店のメニューは季節にもよるが、おおよそ十数種類ある。

来るたびに異なる定食を楽しもうとする客、自分の好みの定食を繰り返し注文する客とさまざまだが、常連客に最も人気のメニューがある。

それが今、高木に提供した旬の食材を使った「おまかせ定食」だ。

ふんわりと焼き上げたほっけから立ち上る香りに、高木は鼻をひくひくさせる。

そしてすぐさま箸を手を取った。

「いただきます」

両手を合わせて挨拶を終えるなり、高木の左手が自然と醤油差しへ伸びる。

しかしそれに手が届く寸前で、美羽がストップをかけた。

「美羽ちゃん？」

意味がわからないといった様子で、高木は目を丸くする。

美羽はにっこりと微笑み、定食に添えた小皿に醤油を注ぎ入れた。

「はい。おじいちゃんが使っているのはこの量です」

「へ？」

醤油を注がれた小皿と美羽の顔を交互に見ながら、高木が疑問の声を上げる。

対して、美羽はくすつと声を出して笑って言った。

「高木のおばちゃんに聞きました。この前の健康診断で、血圧の値が上がっていたんですね？」
優しい声色でなだめながら、醤油差しをカウンターの奥に下げる。

そしてそのまま調理場に戻り、洗い物を始めた。

自分はこの通りの料理人でもなければ、有名料理店で修業を積んだ身でもない。

本音を言えば、提供した料理にお客がどれだけ醤油をかけても、マヨネーズを乗せても、七味を振りかけても構わなかった。

その人が一番美味しいと思える食べ方で、笑顔になってくれさえすればと思う。

でも健康を害すると知った上で、「自己責任だからご自由に」とは言えなかった。

高木は祖母が働いていた頃からこの店を支えてくれている大切な人だからだ。

そんな心情を察してか、美羽の苦言に高木がしゅんとしていると――

「高木さん、奥さんに一本取られたねえ」

カウンターに座っていたもう一人の常連客である原が、にやにやしながら高木に声をかけた。

からかうような原の物言いを耳にした途端、高木は眉間にぐつとしわを寄せる。

「放っておけ！」

低い声で吐き捨て、握り締めた拳をどんとテーブルに叩きつけた。

店の中に不穏な空気が立ち込めていることに気付き、美羽は洗い物を止めて調理場を出る。

そして高木の傍に慌てて駆け寄った。

「おじいちゃん、大丈夫？」

問いかけてみるも、高木からの返答はない。それでも彼の怒りが相当だということはわかる。
すると、うしろめたそうにしている原の表情が視界に入った。

直後、美羽は自分のひと言が喧嘩の原因を作ってしまったことに気付いた。

「おじいちゃん、ごめんね。機嫌直して」

高木の顔を覗き込み、穏やかに語りかける。

「原さんも、私と一緒にごめんなさいしましょう」

次いで原の目を見つめ、子供を諭すように話す。

日頃笑みを絶やさず、常連客たちから可愛がられている美羽の言葉は効果絶大だった。

原はすぐに立ち上がり、高木に「ごめんな」と言いつて頭を下げた。

しかし頑なな様子の高木は何も答えず、振り返ることもない。

そんな二人を見つめながら美羽は小さな溜息をこぼし、そつと調理場へ戻った。

そして数分後、美羽は二人の前に小鉢を一つずつ差し出す。

途端、その中にある物を見て、高木と原は同時に目を見開いた。

「美羽ちゃん、これって……」

美羽が差し出したのは、この店特製の伊達巻だ。

調理に非常に時間がかかるため、常時提供することはできず、常連客といえどもなかなかありつけない代物だった。

時々定食に添えて出されるのを、楽しみに待つ者も少なくない。そんな貴重な代物しろものが普段よりも大きめのサイズで提供されたとあって、二人は頬ほを緩めた。ようやく笑顔を取り戻した二人を前に、美羽はばんっと手を叩く。

「特別におまけするんですから、ちゃんと仲直りしてくださいね」

言いながら、美羽は高木へと向き直る。

「それからおじいちゃん、帰っておばあちゃんを怒ったらダメですよ。おばあちゃんはおじいちゃんが好きだから心配するんですからね」

不意打ちで与えられた忠告に、高木はかあつと顔を真っ赤にした。

夫婦仲が円満なことを、ひやかされたと感じたようだ。

照れ隠しとばかりに、頭をがしがしと乱暴にかきむしる。

その様子を見ていた原が、今一度頭を下げた。

「高木さん、すまなかつたな」

「……ああ」

気まずそうにしながらも、二人は短い言葉を交わした後のち、共に苦笑いを浮かべた。

どうやら仲直りできたようだ。

美羽が安堵あんどの笑みを浮かべると、程無くして、二人は至福の表情で伊達巻を頬張ほおばり始めた。

「そーいや、弁当の配達サービスって、今日から始めるのかい？」

「はい」

食事を終えた高木が会計をしつつ、レジ横に置かれたチラシを見て問いかける。

お釣りを差し出しながら、美羽は元氣よく返事をした。

「今日は早速弁護士事務所さんから、お弁当五個の注文をいただきました」

この定食屋は美羽が一人で切り盛りしていて、他には誰も雇っていない。

翌日の仕込みや開店準備も一人でこなすため、夜遅くまで店を営業するのは難しかった。

そのため、店の営業はランチに限定。

収容人数の少なさは、店の外でワンコインの弁当を販売することでカバーしていた。

幸いにして、土地も建物も祖母の所有物でローンは全く残っておらず、儲けはあまりないが、何とか赤字を出さずにやっていけるくらいの売り上げはあった。

そのことをありがたく思う一方で、安堵あんどしてばかりもいられない。

最たる理由は、店の老朽化だ。

この定食屋兼住宅が建てられたのは、今から五十年以上も前のこと。

数年前に浴室とトイレのリフォームは行ったが、それ以外には何の手も加えていない。

自分一人が住むには、今のままでも十分だけれど、店に来てくれる客の安全を考えれば、そう遠くない内にリフォームを考えなければならなかった。

そのための資金調達の方法として思いついたのが、夕方以降に行う弁当の配達サービスだった。

前日までの完全予約制とすれば、翌日の業務に支障をきたすことは避けられる。

また、店から車で十分ほど行った場所には、商業ビルが建ち並ぶオフィス街があるので、その一帯に地道に営業をしていけば勝算はある。

そう考え、美羽は新たなサービスの開始を決断したのだった。

「数はそんなにこなせませんが、利用してくださる方には満足してもらえるように頑張ります」先週までにビラ配りとポスター貼りを終え、いよいよ今日から配達サービスを始める予定だ。

自分に気合いを入れるように、美羽は片手でガッツポーズを作っで見せる。

そんな美羽を見て、高木が目を細めていると、背後から原がひよっこり姿を現した。

「じゃあ、俺もいっちょ宣伝に協力させてもらおうかな」

名譽挽回とばかりに言い放ち、レジ横に置かれたチラシを数枚手に取る。

「そうだな」

すると原の言葉に同調して、高木も負けじとチラシを手に取った。

「他の常連客にも声をかけて、チラシのコピーを配ってもらえるように頼んでおくから、たくさん注文が入ったときのために美羽ちゃんはゆっくり休んでいてくれよ」

拳で胸を叩く原に、美羽はぺこりと頭を下げた。

「原さん、高木のおじいちゃん、ありがとうございます」

人の優しさに触れるたびに、まだ祖母が店に立っていた頃のことを思い出す。

温かい料理は人の腹を満たし、身体を温めるだけでなく、心も温めてくれる。

両親を事故で亡くした後、祖母の愛情あふれる手料理を食べて育った美羽は、心からそう信じて

いた。

自分も祖母のように、お客さんの心を温められる店を築きたい。

そう強く願いながら、美羽はにっこりと微笑んだ。

「生姜焼き弁当が二つに、唐揚げ弁当が一つ。それからり弁当一つに、幕の内が一つ。よしっ」オフィス街の一角にある駐車場に車を停めた後、注文に間違いがないかを確認する。

配達先の弁護士事務所は目の前のビルの三階のほすだ。

美羽は配達用のケースに弁当を並べ終え、中身を傾けないよう慎重に歩き出した。

ビルに入りエレベーターを降りると、間もなく「赤坂弁護士事務所」と書かれたドアの前にたどり着く。

その場で弁当の入ったケースを右手のみで支え、空いた左手でインターホンを押す。

ドアの向こうでピンポンというチャイムの音が鳴り、それから五秒程の後、インターホンから

女性の声が返ってきた。

「はい、赤坂弁護士事務所です」

「ご注文いただいたお弁当の配達に参りました」

美羽が元氣よくそう告げると、程無くドアが開かれ、中から綺麗な女性が姿を現した。

「中へどうぞ」

「あ、ありがとうございます」

弁護士事務所という、馴染みのない場所に若干緊張しつつ、美羽は促されるまま事務所の中へ足を踏み入れる。

その直後、中にいた三人の男たちが歩み寄ってきた。

「おおっ、待ってました」

「うわぁ、生姜焼き弁当めっちゃ美味そう」

「から揚げもたくさん入ってるな。おい、から揚げ一個と生姜焼き一枚を交換しようぜ」

男たちは勢いよく弁当を手にとると、中身の交換で盛り上がり始めた。

彼らの子供のような言動に、美羽はしばし呆気にとられた後、ふっと噴き出した。

だがそれも束の間、美羽は配達用ケースの中から大きなポットを取り出し、中に入った豚汁をカップに注ぎ入れる。

そしてそれらを手に、笑顔で男たちのもとに歩み寄った。

「すげーうめえ」

「ほんと、コンビニ弁当の比じゃないな」

「ありがとうございます」

会議スペースと思しきテーブルに陣取り、部活帰りの学生のようにががつと弁当を食べる男たちを見て、美羽は目を細める。

すると、入口で出迎えてくれた女性がその輪に加わってきた。

「こんな可愛らしいお弁当屋さんだなんて驚いたわ。よかつたら少しお話ししていきませんか？」

女性からの突然の誘いに、美羽はほんの一瞬戸惑う。

けれど、客の誘いを無下にすることはできないと思い、女性の前の席に腰を下ろした。

それからしばしの間、彼らと歓談する一方で、美羽は持ってきたケースに何度も視線を向けた。中には弁当がまだ一つ残っているが、他に人が来る気配はない。

見る限り、この場にいる誰かが弁当を二つ食べるわけでもなさそうだ。

では一体誰が食べるのかと疑問に思い、もう一度事務所の中をきよろきよろと見回していると、パーティーションの向こう側から、かちやかちやとキーボードを叩く音が聞こえてきた。

「あの……」

美羽は目の前の四人に向かつておおずと声をかける。

それに気付いた女性が最初に口を開いた。

「どうかしましたか？」

「えっと、奥にいらっしゃる方には声をかけなくてよろしいんでしょうか？」

ちらりとパーティーションの方に視線を送りながら問いかける。

すると、四人は顔を見合わせて何とも言えない表情を浮かべた。

「ボスはあんなっちゃうと、しばらく食事はとらないだろうなあ」

「触らぬ神に祟りなしてな」

「あんな依頼人が来た後じゃ、仕方がないんじゃない？」

「普段笑っていることが多い分、怒らせると怖いんだよな。うちのボス」

四人の会話から、奥にいるのがこの事務所で一番偉い人だということ、その人が今とても不機嫌であるということだけはわかった。

だがそれがわかったからといって、このまま何も告げずに帰るといふわけにはいかなかった。目の前の皆がお腹を空かせていたということは、奥にいる人物もそうである可能性が高い。空腹のままでは仕事の効率が悪いし、機嫌も直らないだろう。

何より、料理が冷えて味が落ちてしまうのが気がかりだ。せめて食事が届いたことくらいは伝えたい。

意を決した美羽は残った弁当と豚汁を手に取り、パーテーションに向かって歩き出した。

そのままパーテーションの脇を通り抜けると、パソコンに向かう一人の男性の姿が目に入る。切れ長な瞳と、それを覆う銀縁の眼鏡は深い知性を象徴しているかのようだ。

また、ミディアムグレイのストライプ柄のスーツが男のシャープな体型と長身を際立たせている。少し茶色がかかった髪はきつちりと整えられていて、長い指がまるでピアノを奏するようにキーボードの上を滑っていく。

それら一つ一つに目を奪われ、美羽は息を詰める。

だがすぐに我に返り、首を横に小さく振った。

仕事に来ている場所で、お客に見惚れているわけにはいかない。

そう自分を叱責し、男を驚かせないように静かにパーテーションをノックした。

だが男は眉間に深いしわを寄せたまま、一向に視線を動かさない。

わざと無視しているのか。

それとも本当に気付いていないのか。

どちらとも判断しかねる状況に、美羽は思い切つて男との間合いを詰めた。ことん。

男のすぐ横に立ち、広ががっしりとした作りのデスクの端に弁当と豚汁を置いて様子を見る。

しかしそれでも男は全く反応を見せない。

どうやらパソコン画面以外、何も視界に入っていないらしい。

そう察した美羽は、男の顔とパソコン画面の間に手を差し入れ、上下にひらひらと振ってみる。

途端に、男は驚いたように目を見開き、素早く美羽の方へ視線を動かした。

その視線を受けて、美羽はにっこりと微笑んだ。

「初めまして。お弁当の配達に来ました、栗原と申します。冷めるとお肉が固くなってしまおうので、温かい内にどうぞ」

言いながら、男の前に弁当と豚汁を置き直す。

もしかしたら仕事を中断させたことを怒られるかもしれない。

そんな懸念もあったが、美羽は続けて箸を差し出した。

対して、男は無言のまま箸を受けとると、探るような目を向けてくる。

美羽は笑顔のまま言葉を続けた。

「私、弁護士事務所に来たのは初めてなんですけど……。きつとここに相談に来る人は、すごく

困っているんですよね」

唐突に何の脈絡もない話を始めた美羽に、男は訝しげな表情を見せる。それでも美羽は笑みを崩さず話し続けた。

「悩んで苦しんで、それでやっと決断してここに来たとき、頼る相手が厳しい顔をしていたらきつと驚いちゃうんじゃないかなって思うんです」

そこまで言って、ようやく美羽の意図が伝わったのか。

男の表情に見え隠れしていた怒りの色が消えていく。

「お仕事は大変だと思いますが、一息入れませんか？ この豚汁、私の祖母の得意料理だったんです。味は保証しますし、ぼかぼかと温まりますよ」

笑顔で食事を勧めると、男はつられたように目を細めた。

その瞬間、美羽の心臓がとくんつと跳ねる。

怒りをはらんだ瞳をしているときも、かっこいいと思った。

だが、笑顔の方がその何倍も素敵だ。

美羽は赤く染まった頬を見られないように、とっさに手のひらで覆い隠した。

そんな美羽の目の前で、男は差し出された豚汁に口をつける。

直後、男がふつと息を吐き出し、肩から力が抜けていくのがわかった。

その様子を見てほっとした美羽は、そのままそっと男に背を向けた。

これで今日の仕事は終了だ。

小さな達成感を胸に、美羽が顔を綻ばせながらその場を後にすると、入口の方でそれまで様子を窺っていたのであろう四人に迎えられた。

心配そうな目で見てる彼らに笑顔で応え、精算を済ませて事務所を出る。

そのまま駐車場にたどり着いた美羽は、先程までいた事務所の方を見上げた。

「また、注文してくれるといいな」

脳裏に浮かぶのは、思わず赤面してしまうほど綺麗だった男の笑顔だ。

美羽はほのかな期待と、初めての配達を終えた満足感を抱きながら、帰宅の途についた。

第二話

「今週も今日で終わりかあ」

金曜日のランチ営業を終え、店のカウンターに座った美羽はぼつりとつぶやいた。

ここ最近の出来事を思い返せば、頭に浮かんでくるのはただ一つ。

弁当配達サービスの初日に出会った、弁護士のことだった。

あの日、美羽が抱いた希望は、二日後には現実となっていた。

赤坂弁護士事務所から、ふたたび注文が入ったのだ。

好事に喜びつつ、美羽は初日より緊張しながら事務所の入口をくぐった。

すると、そんな美羽を出迎えてくれたのは、初対面のと看とは別人のような表情のあの男だった。「先日失礼しました。私はこの事務所の所長をしています、赤坂京也あかさかきょうやです。あなたに届けていただいたお弁当、とても美味しかったです。今後もぜひ、よろしくお願ひします」

思わず見惚みどれてしまいそうな綺麗な笑顔に動揺し、美羽は勢いきよく頭を下げた。「こつ、こちらこそ、よろしくお願ひします」

感謝の気持ちを表すよりも、赤面した顔を見られないようにそうしたという方が正しい。

結局、顔を上げた途端にふたたび赤坂の穏やかな笑みを目にし、美羽の小さな努力は泡と消えたのだが――

それからここ二週間ほど、赤坂弁護士事務所からは三日と空けずに注文が入っていた。お得意様になつてもらえただけでも、十分にありがたい。

しかしそれだけでなく、赤坂や所員たちに紹介してもらい、周辺企業からの注文も入るようになり、目標とする販売数を上回る日々が続いている。

忙しさの中にある確かな喜びを実感しながら、美羽は大きく息を吐く。

そして店内をゆつくりと見回し、昔を思い起こした。

『この商売はね、人との出会いで成り立っているんだよ』

かつて祖母が口にした言葉を、心の中で繰り返す。

美羽はその言葉の本当の意味が、ようやく理解できた気がした。

お客から料理の対価として受け取るのは、金銭だけではない。

心を込めて美味しい料理を提供すれば、幸せそうな笑顔を見ることができると、嬉しい言葉をもらえることもある。

時として、また新たな出会いが生まれることもあるのだ。

『この商売の楽しさを知ったら、絶対にやめられないと思うねえ』

祖母は生前、そんな風にも言っていた。

「おばあちゃんが言っていたこの仕事の楽しさが、私にもわかるようになってきたよ」美羽は晴れ晴れとした顔でつぶやく。

そしてぐつと背伸びをすると、カウンターから立ち上がった。

「さて、掃除にとりかかるとしましょうか」

まずは店先にランチ終了を告げる札を掲げなければならない。

そう思い、美羽が札を持って店の外へ出た瞬間、見知った二つの人影に気付いた。

「あつ、美羽ちゃんだ」

「あら、本当。美羽ちゃん、こんにちは」

「こんにちは」

二人の方も美羽に気付き、手を振りながら歩み寄ってくる。

その二人とは、赤坂弁護士事務所に勤める所員の新庄明しんじょうあきらと白石真知子しらいしまちこだった。

ここしばらく、頻繁に事務所を訪れる美羽と二人は世間話をする間柄になっていた。

「もしかして、ここが美羽ちゃんのお店？」

「はい、そうなんです。お二人はお出掛けですか？」

「うん。お客さんとの打ち合わせだね。そっか、ここが美羽ちゃんのお店か」

店の外観を感慨^{かんがい}深げに眺める二人に、美羽はにっこり笑顔で答えた。

「店でお会いするのは初めてですね。夜は配達サービスだけなので、やっているのはランチ営業なんですけど」

美羽の説明を受け、新庄はスーツの袖を引いて腕時計に目を向ける。

そして時間を確認するや否や、残念そうに肩を落とした。

「この時間じゃ、もうランチも終わってるよね」

しょんぼりとした様子の新庄を見て、真知子が彼の肩をなだめるように叩く。

時刻は午後二時を過ぎているが、おそらく二人は昼食をとれていないのだろう。

弁当を配達に行った初日、彼らがひどくお腹を空かせていたのを思い出した。

時間に追われて、食事ができない日も多いのかもしれない。

そう思い、美羽は暖簾^{のれん}を外し終えると、店のガラス戸を目一杯に開いた。

「よかったら、ランチを食べて行きませんか？」

美羽は問いかけながら、二人を店内^{うちなか}に促した。

「え？ いいの？」

「そんな気を遣わなくていいのよ。コンビニだってあるんだし」

申し出に対して新庄は嬉々とした様子で目を輝かせ、真知子は申し訳なさそうに首をすくめる。

対照的な二人に向かって、美羽は問題ないと笑った。

「お得意様ですから、特別です。お二人に時間があればですけど」

美羽の表情を見て、無理はしていないと察したのか、二人は顔^{ほころ}を綻ばせた。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

告げるや否や、新庄は軽い足取りで店の中へ入って行く。

そのうしろ姿を呆れ顔^{あき}で見っていた真知子も、新庄の後に続いた。

「懐かしい感じのするいいお店だね」

「本当、おばあちゃんの家遊びに来たって感じで落ち着くわ」

「古いだけなんですけどね。そう言っていただけだと嬉しいです」

店内を見回して感想を述べる二人に、美羽は微笑みながら温かいお茶を配る。

そして注文を受けた旬のお刺身定食とハンバーグ定食を差し出した。

お客さんが「ただいま」と言って入ってくるができるお店を作りたい。

この店を継ぐと決めたとき、そう決意したことを思い出す。

二人の言葉はそれを肯定してくれているように聞こえて、美羽は心から喜んだ。

「でも、本当にお邪魔しちゃってよかったのかしら。休憩とか、夜の仕込みもあるんでしょう？」

「大丈夫です。お弁当の仕込みは朝のうちにほとんど済ませていきますから。それに、お腹を空かせ

た常連さんをそのまま帰したら罰^{ばち}が当たります」

いまだに申し訳なさそうにする真知子に、美羽は無邪気な笑みを返す。すると、なぜか今度は新庄の方がばつの悪そうな表情を見せた。

「美味しいご飯が食べられるのはありがたいけど、特別待遇を受けるのは気が引けるなあ」

「美羽ちゃんのいい笑顔を二人占めたなんてばれたら、ボスの機嫌がまた悪くなるかもね」
彼らは顔を見合わせ、苦笑いを浮かべながらうなずき合う。

その会話の意味がわからず、美羽が首をかしげていると、新庄が意外な事実を口にした。

「実はさ、美羽ちゃんのお弁当を一番気に入っていて、注文するように言っているのは赤坂さんなんだ。しかも、毎回俺たちの分の支払いまでしてくれるし」

「え？」

にわかには信じがたい事実を告げられ、美羽は思わずぽかんと口を開けてしまった。

初対面のとときの無礼な態度で、怒りを買ったというならわかる。

それなのに、まさかそこまで鼻^{ひじ}にしてみらえていたとは。

驚いた様子の美羽を見て、真知子がくすくすと忍び笑いを始めた。

「きつと美羽ちゃんの言葉がボスの心に響いたんじゃないかしら」

「そんなこと……」

温かい内に料理を食べてほしい。

ただその思いだけで、大層なことを言ったつもりはない。

そう訴えようと思うも、うまく言葉にできなかった。

「本当のところはボスに聞いてみないとわからないけどね。でもお弁当を注文するのも、私たちの分まで支払いをしてくれているのも間違いないから」

「そうそう。だから感謝の言葉はボスに言っておあげてね」

二人の言葉に戸惑いつつも、美羽はこくりとうなずき返した。

「すみません。あんまり夢みたいな話だったので、驚いてしまっただけ」

いつも赤坂は、他の誰よりも忙しく仕事をしているように見えたため、事務所を訪れてもせいぜい挨拶^{あいさつ}を交わす程度だった。

それがまさか弁当を特別気に入ってもらっていたとは……

美羽はいまだに動揺が収まらず、頬^{ほお}を押さえながら目を泳がせる。

すると真知子と新庄は顔を見合わせ、赤坂を擁護^{ようご}し始めた。

「最初があれだったから、ボスもどう接していいか迷っているんだと思うのよね」

「でも、美羽ちゃんの料理を気に入っているのは本当だよ。ここでランチ営業しているって知らず絶対来たがるはずだから、教えてもいいかな？」

「はい、もちろんです」

拒否する理由なんてどこにもないと、美羽は即答する。

その返事に、二人は満足げな笑みを浮かべた。

「あの日はちょっと事情があつて不機嫌だったけど、うちのボスって普段は笑い上戸^{じょうご}なのよ」

真知子の告白に、美羽は真ん丸の瞳をさらに大きく見開いた。

笑顔が素敵だとは思っていたが、笑い上戸じょうとというのはあまりにも意外な一面に思えたからだ。

続いて、美羽と赤坂が出会った日のことを思い出すように、新庄が感慨かんがい深げにつぶやいた。

「美羽ちゃんが来たときはある意味、奇跡的なタイミングだったからなあ」

「あの日、一体何があっただんでしょうか？」

普段は穏やかだという赤坂が、なぜそこまで不機嫌になったのか。

その理由が知りたくて、美羽は思わずおぼろげと問いかける。

すると真知子が険しい表情で説明を始めた。

「うちの仕事は企業からの依頼をメインにしているんだけど、個人から相談を受けることもあってね。例えば相続とか、離婚関係の話が多いんだけど」

美羽は相槌を打ちながら聞き入った。

「そういう相談って延々と愚痴ぐちを聞かされたり、無理難題を要求されることもよくあるの」

「そうなんですか？」

想像もしていなかった話に、美羽は驚きの声を上げた。

弁護士相談といえば、すごく特別なこと、というイメージがあった。

それなのに、まさか愚痴ぐちを言いに訪れる人がいるなんて思いもよらなかったのだ。

だが、弁護士と聞いて身構える人の方が稀まれになってきたと真知子は続けた。

「個人相手の場合、特に神経を使うのよね。法律の話じゃなくて個人的な恨みうらみとか、親族間の根深い争いざかいとか。そういうのを助長しないように気を付けないといけないし」

「離婚問題なんて、気が滅め入いることも多いからな」

肩をすくめて新庄が告げると、真知子は人差し指を立てて美羽に向き直った。

「そうそう、そこで美羽ちゃんの最初の質問に戻るわけ」

「……もしかして、あの日も何か大変な相談事があったんですか？」

話の流れから推察する美羽に、真知子は苦笑いを浮かべてうなずいた。

「うちのボスって、見た目がいい方でしょう？」

「はい」

ストリートな質問を受け、美羽は頬ほをほんのり朱に染める。

少女のように初心しんな反応をする美羽に、真知子は目を細めて話を続けた。

「今回はそれが災ういしちやあってね。離婚の相談に来た女性が、ボスのことを気に入っちゃったの」

「ありゃあ、気に入ったってレベルじゃなくて、ストーカーの一步手前だったぞ」

新庄によると、問題の女性は最初に相談に現れてから、ひっきりなしに事務所に電話をかけてくるようになったらしい。

そして相談と称して度々事務所を訪れては、赤坂に過剰なスキンシップを迫っていたという。

さらには、予約なしで事務所に乗り込んで来て長時間居座り、忙しい赤坂を無理やり食事に誘う始末。

その女性の言動は業務妨害以外の何物でもなかったと、真知子と新庄は共に辟易へきえきとした様子で口を揃えた。

美羽は次々と耳に入ってくる情報に、ただ嘔然とするしかなかった。

「離婚の理由は、ある日突然夫の顔を見るのが嫌になったからって言ってたな」

「あの日、ボスがあの子を事務所からつまみ出したときはスカッとしたわ。何度警察を呼んでやろうと思ったことか。あの子の旦那の方の弁護士だったら、格安で担当してあげるわよ」

いつか自分が相談者になったときのことを思えば、弁護士には親身に対応してもらいたい。でも、どんな相談者でも大切に扱ってほしいと身勝手なことを言うつもりはなかった。

人を好きになることに罪はない。

しかし曖昧な理由で離婚を申し立て、その決着をつける前に強引に赤坂に迫ったという女性に対し、美羽は嫌悪感を抱いた。

それと同時に、赤坂に申し訳ないという気持ちが入み上げてきた。

「私、赤坂さんに謝らないと。事情も知らないくせに、勝手なことを言ってしまっつて」
うつむき加減で、美羽は声を震わせながら後悔の言葉を口にした。

すると、二人は慌てたように手を左右に振った。

「美羽ちゃん、誤解しないでね。確かにボスが不機嫌だったことには正当な理由があったけど、美羽ちゃんの言ったことだって間違ってたんだから」

「そうそう、俺たちもはつとさせられたし」

忙しさにかまけて、相談者に安心してもらえない対応ができていないこともあった。

どんな事情があるかなど、相談者は知る由もない。

プロである以上は、それを悟らせるべきでもない。

そのことを気付かせてくれて感謝していると続ける二人の言葉にも、美羽は素直にうなづくことができなかった。

「でも……」

自分に非があれば素直に認め、「ごめんなさい」の言葉をきちんと言える人でありなさい。

亡き両親と祖母にそう教えられて育った美羽は、自分の言動を心から反省した。

「今夜も注文をいただいているので、そのときにちゃんと謝ります」

決意を込めた瞳で、美羽は力強くそう宣言した。

すると、新庄と真知子は困り顔で互いを見合った。

「それはいいけど、ボスは謝罪なんて望んでないと思うよ」

「そうよ。いつもお弁当を注文しているのがいい証拠」

美羽の弁当を注文するようになって以来、赤坂はそれをひと口食べるだけで、嘘のように機嫌が直るようになったのだという。

結果、所員の間で美羽の弁当は「魔法の弁当」と呼ばれているらしい。

そんな事実を告げられ、美羽は顔を綻ばせた。

「じゃあ、お詫びとお礼を兼ねて、今日は特製の伊達巻をおまけしちゃいます。常連さんたちの間では結構評判なんですよ」

言いながら美羽は腕まくりをする。

そしてさつそく仕込みに入ろうと、軽い足取りで調理場へ向かった。

第三話

「いらつしやい、美羽ちゃん」

「真知子さん、こんばんは」

午後七時過ぎ。

赤坂弁護士事務所を訪れた美羽の手には、いつものように五つの弁当があった。

だがその顔に浮かぶ笑みはいつもと違い、少し強張^{こわば}っていた。

それもそのはず、この日はただ弁当の配達をするのではなく、赤坂に謝罪をしようと意気込んでいたのだ。

駐車場に降り立ったときからすでに、美羽の心臓はどきどきと騒がしい状態だった。

そんな心境を正確に汲み取ったらしく、真知子は笑いをこらえながら美羽の持つトレイを受け取った。

「真知子さん？」

「とりあえず所員の分は私が配っておくから、美羽ちゃんはボスの分を持って行ってあげてね」

「えっ、いや、あの……」

ここには仕事で来ているので、全部自分でやらなければならない。

美羽はそう申し出を断ろうとするも、真知子は先手を打つように赤坂の分の弁当を取り分けた。流れるような動作でアオサの味噌汁をカップに入れ、弁当と一緒に差し出してくる。

反射的にそれを受け取ってしまった美羽には、もはや反論の余地は残っていないかった。

「ちなみにボスは今、応接室にいるわ。もちろん一人だから安心してね」

ウインクをしながら、真知子は奥にある応接室を視線で示した。

それを聞いた美羽は、さあっと血の気が引いていくような感覚を覚えた。

協力してくれるのはありがたい。

でも、突然二人つきりにされては困る。

涙目でぶんぶんと首を振りながらそう訴える美羽に、真知子はいい笑顔でうなずいて親指を立てた。

真知子の表情には、声にならない「グッドラック」という言葉が込められているようだった。

想定と違う展開に美羽は軽い眩暈^{めまい}に襲われる。

とはいえ、こうなってしまうてはもはや逃げ出すことなどできない。

元より、仕事を投げ出して帰るなんてことはあり得ないのだ。

一旦腹をくくったとはいえ、緊張で押しつぶされそうになりながら、美羽はとぼとぼと応接室に向かって歩き出した。

とんとんっ。

「はい」

意を決してドアをノックした直後、中から聞き覚えのある声が響く。そこに赤坂がいることはわかっていたのに、美羽の肩がびくつと震えた。だが、いつまでもドアの前で固まっているわけにはいかない。

「すーはーすーはーと数回深呼吸を重ねてから、美羽はようやく応接室のドアを押し開いた。」「失礼します」

軽く顔を下げた後、室内へ足を踏み入れる。すると、美羽の姿を目に留めた赤坂が柔らかな笑みを浮かべていた。

「ああ、美羽さんでしたか。いつもありがとうございます」

その表情に見惚れそうになり、先程までと違った理由で身体が強張る。

だがそれを誤魔化すように、美羽は伏し目がちにテーブルの上に弁当を置いた。

「えっと、チキン南蛮弁当でよろしかったですよね？」

いつもより早口で言いながら、箸や汁物をセッティングしていく。

そして赤坂が箸を手に持ったタイミングで、美羽はもう一つのパックを差し出した。

「これは？」

注文した覚えのないそれを見て、赤坂は不思議そうに質問する。

対して、美羽は慌てて答えようとするも――

「えっと、これはうちの名物の伊達巻で……つてそうじゃなくて」

上手く意図を伝えられず、もごもごと口籠ってしまう。

それでも何とか呼吸を整え、美羽は必死に自分の思いを口にした。

「こんなものでお詫びになるとは思いませんが、この前は勝手なことを言っすみませんでした」大きな声で謝罪の意を告げ、勢いよく頭を下げる。

突然の謝罪の理由がわからなかったのか、赤坂は動きを止めて美羽を凝視する。

そして数秒の後、気を取り直したように口を開いた。

「美羽さんは何に対して謝罪されているのでしょうか？」

謝罪を受ける覚えなど全くない。

そう話す赤坂に、美羽は少しだけ顔を上げて眉尻を下げた。

「新庄さんと真知子さんからお話を伺ったんです。私が最初にここに来た日、赤坂さんの表情が強張っていた理由を」

「……………」

「私、何も知らずに偉そうなことを言ってしまったことが申し訳なくて」

右手で左手首を握り締め、美羽が心からの後悔と謝罪を口にした途端、赤坂は一瞬苦虫を噛み潰したような顔をした。

「余計なことを……」

「え？」

赤坂のつぶやきはごくごく小さなもので、美羽はよく聞き取れずに疑問の声を上げる。

すると赤坂は、すぐに表情を笑みに変えた。

「美羽さんの言ってくれたことはすごく嬉しかったので、どうか謝らないでください。所長なんて立場になると、相談者は元より、所員たちからも間違いを正してもらえなくなりますからね」「間違いだなんて」

無礼な訪問者に対する赤坂の憤りは正当なもので、決して間違いではないと思う。勘違いも甚だしい発言をした自分が全面的に悪いのだ。

そう思いながら、優しい言葉で慰めてくれる赤坂の前に唇をきゅつと噛みしめた。

美羽の表情から後悔の念を察したのか、赤坂は困ったような表情を見せた。

「そんな顔をしないでください。私も所員たちも美羽さんの笑顔に元気をもらっているんです」

「赤坂さん……」

予想外の嬉しい言葉に、美羽は頬を赤らめる。

続けて赤坂は目を細めながら提案を口にした。

「そうですね。美羽さんが気にするようでしたら、ここは相殺としましょうか？」

「相殺、ですか？」

聞きなれない言葉に、美羽が不思議そうに反復すると、赤坂はすぐにその真意を口にした。

「あのとき、美羽さんのお弁当を食べるのが遅れた私の謝罪と、美羽さんの謝罪をおあいこつてことにしましょうっていう意味です」

予想だにできなかった提案に、美羽は驚いて何の言葉も返せなかった。

しかし、「いいですね？」と笑顔で念を押されてしまえば、うなずき返すしかない。

「では、お弁当をいただくとしましょう」

美羽の了承を得たことに満足したのか、赤坂はそう言うなり、伊達巻に箸を伸ばした。

「これはまるでプリンみたいですね。すごく美味しいです」

伊達巻を口にした直後、赤坂が感嘆の声を上げる。

彼の称賛を受け、美羽はようやく身体の強張りを解くと、はにかんだ笑みを見せた。

「ありがとうございます。数は作れないんですけど、うちで一番人気のメニューなんです」

「こっちのチキン南蛮も、本場の宮崎で食べたものより美味しいです」

次々と褒め言葉を口にしたながら、赤坂は夢中で箸を進めていく。

その様子を見て、美羽は小さく安堵の溜息をついた。

とりあえず、謝罪という一番の目的は果たすことができた。

いつまでもここには食事の邪魔になってしまおうだろう。

そう思い、美羽はいつもそうしているようにそっとその場を去ろうとする。

だが赤坂に背を向けた瞬間、背後から呼び止める声が聞こえてきた。

「美羽さん、この後にお仕事の予定はありますか？」

「い、いえ、この後は帰宅するだけです」

唐突に投げかけられた質問に、美羽は驚きつつ反射的に答える。

すると赤坂はふたたび提案を口にした。

すると赤坂はふたたび提案を口にした。

「では、もう少し話し相手になつてもらえませんか？」

赤坂は手を差し出し、対面のソファを示す。

その申し出を断る理由など見当たらず、美羽は戸惑いつつもそこに腰かけた。

「美羽さんの料理は、毎日食べても飽きませんね」

「そんな……、メニュー数があんまり多くないので、申し訳ないくらいです」

身に余る賛辞に、美羽は赤坂を直視できずにうつむいてしまう。

きつと彼なら見た目も味も、自分が作るものよりもずっと上質な料理をたくさん知っているはずだ。

にもかかわらず、自分の料理を満足げに食べてくれる。

それが美羽にとつては嬉しくもあり、少しだけ申し訳なくもあつた。

眉をハの字にして押し黙る美羽に、赤坂は優しい声色で話し続ける。

「そんなことはありません。一人身が長いせいか、こうして家庭の温かみを感じるご飯が食べられて嬉しいです」

気取つた外食には飽き飽きしていたと話す赤坂の表情を見て、美羽の鼓動が速まる。

一人身で家庭料理に飢えている。

赤坂に関する些細な情報に、嬉しいと感じている自分がいた。

でもそれは、ただの定食屋である自分が彼のような男に抱いていい想いではない。

美羽はそう自分に言い聞かせ、芽生えてしまった淡い気持ちに蓋をした。

すると突然、赤坂がくすつと笑う声が聞こえた。

それに気付いた美羽は、その理由がわからず首をかしげる。

「どうかしましたか？」

「いえ、身近にいい実例がいたなと思ひ出しまして」

くすくすと笑いながら、赤坂はその実例というのは自分の親友のことだと続けた。

「三年程前まで一人身同士でよく食事に行つていたんですが、家庭料理が得意な彼女ができてから、あいつは全くと言っていいほど外食をしなくなつたんです」

愉快そうに語る赤坂の表情は、いつもよりさらに穏やかだった。

「美羽さんのお弁当を食べるようになって、友人が外食をやめた理由がよくわかりました」

「私の料理で喜んでいただけただけなら、とても嬉しいです」
これ以上褒め言葉を聞いたら、頭が煮え立つてまともに歩くことさえできなくなりそうだ。

そんなことを考え、美羽は話を遮るようにお札の言葉を紡いだ。

火照る頬をどうにかしようと、手を当てて熱を冷まそうと試みる。

その様子をじつと見つめていた赤坂は、テーブルの上に静かに箸を置く。

そして姿勢を正し、真剣な眼差しで真つ直ぐに美羽の目を見て問いかけた。

「美羽さん、次の休日をお聞きしてもいいですか？」

突然の質問に驚き、美羽は目を見開きながら答えた。

「休日ですか？ えっと、仕入れの関係があつて土日祝日はお店を休みにしているんですけど」

「そうですか」

美羽の返事を聞き、赤坂は顎に手を当てて考え込むような仕草を見せる。もしかしたら、ランチに店に来てくれようとしているのだろうか。

しかし赤坂が次に口にした言葉は、全く予想外のものだった。

「では明日の土曜日に、一緒に食事に行きませんか？」

「はえ？」

思いがけない誘いに、美羽は素つ頓狂な声を上げてしまう。

すると赤坂はふふつと笑みをこぼしながら続けた。

「いつも美味しい料理を作っていたらいいからお礼に、ぜひご馳走させてください」

「そんな、お礼をされるようなことはしていませんから」

自分はただ注文を受けて弁当を作り、届けに来ているだけだ。

仕事として当然対価も受け取っているので、感謝されるようなことではない。

慌てて手を振る美羽に対し、赤坂は寂しげな表情で問い直した。

「もしかして、他に何かご予定がありましたか？」

「いえ、そういうわけでは……」

「じゃあ、明日の夕方五時にご自宅まで車で迎えに行きますね」

「は？ え？」

おろおろしている間に、予定を決定事項として告げられてしまう。

美羽は断ろうとするも、すでに赤坂は食事を再開してしまっていた。

こうなつては、食事の邪魔をして押し問答を繰り返すわけにはいかない。

結局、赤坂の提案を受け入れる形で帰宅することとなった。

謝罪に来たはずなのに、まさか食事に誘われるとは思わず、その日、美羽はなかなか寝付くことができなかった。

第四話

「美羽さん、こんばんは。そのワンピース、とてもよくお似合いですね」

約束した、土曜日の午後五時ちょうど。

店の前にシルバーのスポーツカーが横付けされた。

運転席から降り立つすらりと長い脚を見ただけで、美羽の心臓が騒がしくなる。

赤坂は美羽の姿を真正面から見つめると、眩しそうに目を細めた。

そして流れるような動作で美羽の手を取り、助手席にエスコートする。

今まで経験したことがないくらい紳士的に振る舞われ、美羽は眩暈すら覚えた。

勘違いしちゃダメ。

褒められたのは私じゃなくて、ワンピースなんだから。

仕事ではいつもエプロンをかけているため、服のことを気に留めることはない。

だからこそ気を遣って褒めてくれたのだろうと、美羽は強く自分に言い聞かせた。

スマートなエスコートに、慣れた様子で紡がれる褒め言葉。

それらに馬鹿みたいに舞い上がる一方で、過去にどれだけ多くの女性たちとこうして食事に行っただろうと思うと、胸にざきりとした痛みを感じた。

しかし美羽はそれをひた隠しにし、「ありがとございます」と返しながら一步を踏み出した。

「足元に気を付けてくださいね」

ヒールが高い靴を履いている美羽を気遣い、赤坂は長身を屈めて手を差し伸べる。

どうかこのドキドキが伝わりませんように。

そう願いながら、美羽は遠慮がちに赤坂の手を支えにして助手席に乗り込んだ。

大きな手のひらはいとも容易く美羽の手を包み込み、与えられた温もりは手を離れた後もしばらくの間消えることはなく――

店に着くまでの間、美羽は感触が残る手をぐっと握り締めていた。

「ここ、ですか？」

案内された店を見上げながら、美羽はぼかんとした。

その店はレストランというよりは、どこかの旅館のように見えた。

「はい。ここは料理ももちろん美味いんですが、落ち着いた雰囲気も楽しめると評判なんです」
そう言いながら、赤坂はそつと美羽の背中に手を添えた。

不意打ちの感触に驚き、ぴくりと身体を跳ねさせる。

胸の高鳴りがばれてしまうのではと心配しつつ、美羽は赤坂に促されて店の中へ入った。

「いらっしやいませ赤坂様」

入口の扉を開けるとすぐに、着物を着た女性が一人、深々と頭を下げて出迎えてくれた。

髪をきつちりと結わい、淡い藤色の着物をまとった女性は、まるで老舗旅館の女将のような風情だ。

「女将、今日はよろしくお願ひします」

「どうぞ、お上がり下さい」

度重なる驚きと緊張の連続で固まっていた美羽は、促されてはつと我に返った。

そして女将がスリッパを差し出したのを見て、慌ててそれに履き替えた。

すると隣からくすくすという小さな笑い声が聞こえてくる。

途端、美羽は羞恥で全身を赤く染めてうつむいた。

生まれて初めて異性と食事に来た場所が、こんなに格式の高い料理屋では、戸惑うのも無理はないと思っほしい。

胸の中で、美羽は切に訴えた。

学生時代に女友達と食事に行く際は、ファミレスがせいぜいだった。

祖母が定食屋をしていたこともあって、外食することがほとんどなかったのだ。

友人が同い年の恋人とフランス料理を初めて体験したとき、彼氏が緊張のあまりにフィンガーボールの水を飲んでしまったという話を聞いて、仲間内で大爆笑になったことを思い出す。

もしかしたら自分も大きな失態を犯してしまうのではないだろうか。そんな懸念と共に、ふたたび緊張感が襲ってくる。

最悪の事態を想定しながら、美羽は一人で赤くなったり青くなったりを繰り返していた。するとその様子に気付いた赤坂は、そっと美羽の手を握り締めた。

「大丈夫ですよ」

不安を察してかけてくれたであろう言葉に、美羽は思わず赤坂の顔を見上げる。

直後、優しい光を灯した瞳に見つめられ、はっと息を呑んだ。

「さあ、行きましょう」

先を行く女将の背を視線で示し、赤坂は美羽の手を引きながらゆっくりと歩き始めた。

繋がれた手を見つめ、美羽はただ導かれるままについて行く。

まるで現実感がなく、ふわりふわりと雲の上を歩いているような気分だ。

それから女将が続いて長い廊下の角を曲がると、「菖蒲の間」と書かれた部屋に到着する。

中に入ると、大きな座卓が設置されていて、その上には豪華な懐石料理が並べられていた。

先に入室した女将は、中央に置かれたすき焼きの鍋に火をかけていた。

「お飲み物はいかがなさいますか？」

女将に笑顔で問いかけられるものの、美羽は何も返せなかった。

何せメニューがないのだから、どんな飲み物があるかわからないのだ。すると赤坂が小さな声で尋ねた。

「美羽さん、お酒は大丈夫ですか？」

「あんまり強くはないんですけど、少しなら大丈夫です」

優しい耳触りの声に、美羽はすでに酒を飲んだかのようにほんのりと頬を染める。

一方、美羽の返答を聞いた赤坂は女将に視線を戻した。

「女将、料理に合う冷酒を二つとお茶を一つお願いします」

「かしこまりました」

注文を受け、女将は恭しく頭を下げて部屋を後にした。

背後で戸が閉まった音が聞こえると、赤坂に座るよう促される。

そして赤坂自身は美羽の対面へと腰を下ろした。

「ここにはよくいらっしゃるんですか？」

胸をさすりながら部屋の中を見回し、美羽は何とかして緊張を和らげようと問いかける。

対して、赤坂は笑顔で答えた。

「ええ。何度か仕事の打ち合わせで来たことがあるんです」

言いながら、赤坂は菜箸を手取る。

早くもいい具合になってきたすき焼きを取り分けようとしていることに気付き、美羽は慌てて腰

を浮かせた。

「赤坂さんっ、私がやりますから」

「いえ、私にやらせてください。今日は美羽さんと食事に行けることを年甲斐もなく楽しみにしていたんです。それに普段は人の世話を焼くことがないので、やってみたいんです」

言葉通り、とても楽しそうな表情を見せる赤坂に、美羽は迷いつつも腰を下ろした。ただのリップサービスだとわかっている。

それでも今日という日を楽しみにしていたという赤坂の言葉は、美羽の心をじんわりと温めた。

「冷めない内に、たくさん食べてくださいね」

赤坂が差し出した皿を受け取ると、美羽は慌てて箸を手に持つ。

「いつ、いただきます」

冷めない内に、冷めない内に……

呪文のように頭の中でそう繰り返しつつ、肉を一切れ掴んでばくつとかじりつく。

すると囁まずともどろりと溶けてなくなる肉の食感と、ほんのり甘い割り下の風味に、思わず頬が緩んだ。

「美味しい」

緊張で味なんてきつとわからないだろう。

そう思っていたが、すぎ焼きのあまりの美味しさに美羽は感嘆の声を漏らした。

元々食べることも作ることも大好きな美羽は、それをきっかけに目の前の食事に夢中になっていく。

無邪気に料理を頬張る美羽を見て、赤坂もまた頬を緩める。

そして自身も料理に箸を伸ばしつつ、くるくると変わる美羽の表情を楽しげに眺めていた。

「お食事の味はいかがでしたか？」

「とっっても美味しかったです。特に煮ごりと茶碗蒸しなんて、私が作るものとは全然違っていて。

まだまだ勉強しなくちゃって思いました」

食後のデザートを運んで来た女将に、美羽は感動を素直に述べた。

出される料理の美味しさに、赤坂が目の前にいることも忘れていたくらいだ。

すると赤坂が忍び笑いをしながら美羽の意見に同調した。

「そうですね、女将。俺の存在がかすんでしまったくらいですからね」

「あら、本当ですか？ それはごめんなさいね」

茶化すような赤坂の言葉に、女将もまた大げさに返す。

凶星を指された美羽は、気恥ずかしそうに顔を伏せた。

そして先程までの自分を思い出し、「すみません」と肩をすくめた。

「そんなに気に入ってもらえたら、うちの料理長にレシピを書いてもらいましょう」

「いいんですか？」

思いがけない女将の好意に、美羽はとっさに身を乗り出して問い返す。

「ええ。他ならぬ、赤坂さんの頼みでもありますからね」

「え？」

女将の言葉を聞いて、美羽は勢いよく赤坂を振り返った。

直後、赤坂はばつの悪そうな顔をしながら頭をかいた。

「言い過ぎですよ」

「あらあら、ごめんなさいね」

知られたくなかった事実を暴露されたせいか、赤坂が困り顔で女将に抗議する。

だが女将は悪びれる様子もなく、ふたたび美羽に向き直った。

「実はご予約をいただいたとき、赤坂さんから美羽さんも料理屋をなさっていると伺っていたんです」

「いえ、そんな大したものじゃないですから」

自分が経営しているのは小さな定食屋で、この店のような格式の高い店とはわけが違う。

美羽はぶんぶんと首を振ってそう訴える。

しかし女将は笑顔のまま、さらに美羽の動揺を煽る言葉を口にした。

「まだお若いのに、とても美味しい料理を作られるって聞いています。赤坂さんったら、この料理を気に入るだろうから、色々教えてあげてほしいとおっしゃられてね」

くすくすと笑いながら、さらなる暴露を続ける女将に、赤坂は諦めたような表情を見せた。

そんな二人を前に、美羽は赤坂の気遣いに喜びを感じていた。

「他でもないお得意様の大事な方のためですから、私も一肌脱がせてもらいますよ」

大事な方だなどに見当違いも甚だしい言葉に、美羽は目を見開いた。

だが否定しようにも、ゆでダコ状態の美羽は口をばくばくさせるだけで何も言い返すことができない。

同じく、赤坂からも否定の言葉が出てこないことが不思議でならなかった。

今、赤坂は一体どんな表情をしているのか。

美羽は怖くて彼を見ることができなかった。

「すごい雨」

女将に帰りの挨拶を済ませ、美羽はほろ酔い気分で店の玄関口に立っていた。

赤坂から、勘定を済ませてくるから外で待つようにと言われたからだ。

外に出ると、驚くほどの大雨になっていて呆然と空を仰ぐ。

天気は客足に影響があるため、いつもこまめにチェックしていた。

予報では、今日は降ったとしても小雨程度だと言っていたはずだ。

それなのに……と美羽は愚痴りたい気持ちで溜息をついた。

赤坂とのお出掛けということで、今日は履き慣れないヒールの高い靴で来てしまっていた。

これで駐車場まで走れるだろうか。

困惑していると、不意に背後から赤坂の声が聞こえてきた。

「うわあ、これはすごいね」

慌てて振り返ると、赤坂も店の軒先から外に手を伸ばしていた。隣に並んだ赤坂の横顔を見つめ、美羽はどきまぎしながら頭を下げる。

「あの、ご馳走様でした」

つい数分前、美羽は自分の食事代を支払おうとした。

こんな高級そうな店で、何もかもご馳走になるわけにはいかない。

そもそも、そんな理由なんてどこにもないのだ。

しかし赤坂が有無を言わさぬ笑顔で美羽を制し、精算に向かってしまった。

店の中で支払い云々で言い争うのは、彼に恥をかかせてしまうことになるのではないか。

そんな懸念から一度は納得したものの、美羽は申し訳なく思い、弱々しい声でお礼を述べる。

すると赤坂は、気にするなどばかりに手のひらをほんつと美羽の頭の上に乗せた。

「どういたしまして。こちらこそ、今日は付き合ってくれてありがとうございます」

低いトーンの優しい声が、美羽の耳をくすぐる。

赤坂の口調が以前よりも打ち解けたものに変わっていて、どうしようもなく美羽の心を惑わせる。

ふたたび速まる鼓動に気付かれまいと、美羽は胸を押さえて気持ちを落ち着かせようとする。

すると赤坂は視線を外に向けながら口を開いた。

「車を回してくるよ。ここで待っていてくれるかな？」

そう尋ねられた瞬間、美羽は勢いよく顔を上げた。

雨に濡れないようにと、一人で車を取りに行くつもりなのだろう。

だが、たとえ子供っぽいワガママだと思われても、うなずくことはできなかった。

「私も一緒に行きます」

駐車場まで、それほど距離があるわけではない。

美羽は小声で、上目遣いに訴えた。

「でも、濡れてしまうよ？」

赤坂の視線が一瞬美羽の靴を捉える。

それでも美羽は頑なに一緒に行くこと繰り返した。

「一緒に、いいんです」

お酒のせいなのか、気持ちが高ぶり、今はどうしても彼の背を見送りたいくなかった。

ほんのわずかな時間でも、一人ぼっちで待つことが嫌でたまらなかった。

強い思いは行動となって現れ、美羽は無意識に赤坂のスーツの袖をぎゅっと掴む。

美羽の行動に、赤坂はわずかに目を見開いた。

だがすぐに表情を穏やかな笑みに変え、瞳を揺らす美羽に向かってうなずき返した。

「じゃあ、転んだら危険だからお手をどうぞ」

言いながら、赤坂がすつと美羽の前に手を差し出した。

優しい眼差しと、自分よりもずいぶん大きな手。

それを見た美羽はなぜか涙が出そうになる。

だがそれをこらえて、大きな手のひらの上にそつと自分の手を重ねた。

するとすぐさま赤坂はスーツの上着を脱ぎ、傘代わりに二人の頭上に被せる。服の下で二人はほんの一瞬微笑み合うと、そのまま車に向かって走り出した。結局、車に到着したときには、二人共膝から下がびしょ濡れ状態だった。べたりと服が身体に貼りつく感触は不快だが、それでも美羽は不思議な幸福感に包まれていた。車に乗り込むとすぐに、赤坂が身を乗り出して後部座席を探る。そして取引先の企業からもらったのであろう、社名入りの新品のタオルをビニール袋から取り出し、美羽に差し出した。

「ありがとうございます」

ありがたく受け取って礼を告げ、美羽は濡れた足を丁寧に拭いていく。

そうしている間に、赤坂がハンドルを握ってゆつくりと車を発進させた。

車が走り出してから程無く、美羽は次第に頭がぼおつとしてきたのに気が付いた。

遅れてお酒が効いてきたのだろうか。

自宅を目前にして、美羽はぼんやりと見慣れた景色を瞳に映していた。

思考が上手く回らず、家に着いたというのに身体が鉛のように重くて思い通りに動かすことができない。

そうこうしている間に、不意に助手席のドアが開かれた。

「美羽ちゃん、大丈夫？」

今までは「美羽さん」と呼ばれていたのに、急に「ちゃん」付けで呼ばれ、美羽はどきつと胸を

弾ませて我に返る。

次いでこくこくとうなずき返した。

そして差し出された手を掴み、ふんわりと宙に浮いたような感覚で降車する。

だが、地に足をつけてもなお、身体を襲う浮遊感は消えなかった。

「美羽ちゃん、本当に大丈夫？」

バッグから鍵を取り出すにも手間取る美羽に、赤坂は心配そうに今一度問い直す。

「大丈夫です」

それに対し、美羽は心配いらないと笑顔で返した。

しかしその直後、意識が急速に朦朧もうろうとして足元がふらついてしまい――

そのまま視界が暗転した。

* * *

「美羽ちゃん！」

突然脱力した美羽を、赤坂はとっさに抱き止めた。

そして華奢華しゃな肩を揺らし、大きな声で呼びかける。

だが美羽は荒い呼吸を繰り返すだけで、何の言葉も返さない。

胸は大きく上下し、頬ほは少し赤みを帯びているように見える。

額に手を当てれば、発熱しているようにも感じられた。
一刻も早く休ませなければならぬ。

赤坂は即断すると、美羽の手に握られていた鍵を取った。
そして美羽の身体を横抱きに抱え、片手でガラス戸の鍵を開けた。
おそらく二階が住居スペースなのだろう。

店内を見回しながら目星を付け、美羽の靴を脱がせて店の奥にある廊下に足を踏み入れる。
そこでふたたび美羽の様子を確認するが、苦しげに眉を寄せ、目は閉じたままだった。
すると赤坂は美羽の身体を抱え直して、迷うことなく階段を上がっていく。

やがて二階に到着し、片隅に布団が畳んで置かれている和室へ入った。
抱えていた美羽の身体を畳の上にそっと降ろすと、壁に背を預けさせる。
そして赤坂は畳んであった布団をその場に広げた。

それを終えると部屋の隅に置いてあったバスタオルを手に取り、美羽の傍へ戻っていく。

「美羽ちゃん？」

頬を軽く撫でながら呼びかけるが、美羽は一向に目を覚ます気配を見せない。

しかしその寝息が苦しげでないことに、赤坂は安堵の溜息をついた。

このまま眠らせてやりたいが、身体が濡れた状態で布団に寝かせるのは避けたい。

とはいえ、勝手に着替えさせるわけにもいかない。

苦肉の策として、手にしたタオルでスカートの裾からすらりと覗く白い脚を拭くに留めた。

気休めかもしれないが、少しはましになったはずだ。

そう判断し、ふたたび美羽の身体を抱き上げて布団の上に横たわらせる。

次いで上からそっと厚手の毛布をかけてやると、赤坂はようやく肩の力を抜いた。

壁に背を預け、ゆっくりと視線を巡らせる。

するとわずかに開かれた戸の隙間から、隣の部屋にある仏壇が視界に入った。

途端、赤坂は何かに導かれたような気がして仏壇の前に歩み寄り、そこに置かれている三つの写真をじっと見つめた。

おそらく美羽の祖父であろう男性と、祖母であろう女性が写っているものがそれぞれ一枚ずつ。

最後の一枚には、小学生と思しき年頃の美羽を挟むように立つ両親が写っていた。

「家族みんな、か」

ここは一人で住むには大きすぎる家だ。

ましてや家族と共に過ごした思い出のある場所。

ここで気丈に生きてきた美羽を思い、赤坂はぐっと顔を歪ませる。

そして美羽と出会うきっかけとなった出来事を思い出した。

赤坂が初めて美羽の店に弁当を頼んだ日から、一週間程前のこと。

その日、赤坂はオフィス街から少し離れた場所にある、老舗の和菓子店に立ち寄っていた。

事務所で出す来客用の茶菓子が切れたため、外出ついでに買って帰ろうと思ったのだ。

普段は所員の誰かに任せているのだが、たまたまその日外出の用事が入っていたのは赤坂だけだった。

所員たちへの差し入れも含め、赤坂はその店で手提げ袋二つ分の菓子折りを購入した。

お代を支払い、店を出ていこうとしたそのとき――

割烹着姿の女店主に呼び止められ、一枚のチラシを差し出された。

「お客さん、近くのオフィス街で働いているんでしょう？ よかったら、今度ここを使つてあげて」

言われてチラシに目をやれば、配達弁当の広告だった。

「お薦めなんですか？」

問いかければ、女店主は腰に手を当てる大きくなずいた。

「お薦めもお薦めよ。二十歳の女の子が一人でやっているんだけど、味は私が保証するから」

自信満々に言い切つて、自分の胸を拳でぼんつと叩く。

その仕草を見て、赤坂はくすつと声を出して笑った。

今時、こうした肝っ玉母さんのような存在は珍しい。

そう思いながら、赤坂はもう一度チラシに目を向けた。

「そんなに若いのに、一人でお店をやっているなんてすごいですね」

若いからこそ、失敗を恐れずに色々なことにチャレンジできる。

そんな考えもあるが、赤坂は単純に少女の決断に賞賛の言葉を贈った。

すると女店主はなぜか寂しげな表情を見せた。

「本当に……、頑張り屋ですごい子なんだよ。家族をみんな病気や事故で亡くしちゃってね。それでも、おばあちゃんが切り盛りしていた店を守ろうと、必死で頑張っているんだから」

言い終えると、店主はしんみりした雰囲気振り払うかのように豪快な笑みを見せた。

「お兄さんは仕事ができそうだし、稼いだ分を少しでも彼女に回してあげてよ。もちろん、うちも御贔屓にしてほしいけどね」

女店主が冗談まじりに言い放つと、赤坂は笑顔でうなずき、購入した茶菓子とチラシを手に事務所に戻った。

そしてすぐに新庄に声をかけ、配達サービスの開始日に所員全員分の弁当を注文するように頼んだのだ。

そうして弁当を届けに来たのが美羽だった。

その日、赤坂は厄介な案件を片付けた後で、とても気が立っていた。

けれど、そんな自分にも臆することなく、優しく声をかけてくれた彼女――

赤坂はその凛とした美羽の姿に心惹かれたのだ。

以来、毎日のように弁当を頼むようになり、少しずつ会話を重ねるうちに、どんどん彼女を愛おしく思うようになっていった。

「あの女店主は、さながらキュービッドってところかな？」

仏間から和室に戻った赤坂は、目の前で眠る美羽に優しい眼差しを向けた。

「君の作る料理の味が優しいのは、君の心が表れているからなんだろうね」
美羽の額に浮かぶ汗をタオルでそっと拭き取りながらささやく。

孤独を抱えた少女が、何を心の支えに立派に一人立ちしたのか。
あどけない少女のような寝顔を見つめながら、それを考えずにはいられなかった。
先程見た写真にあったのは、未来は幸せに満ちていると信じて疑われない少女の輝く笑顔だった。
そんな少女の姿が、今の美羽に重なっていき――

赤坂は胸を締め付けられる思いがした。

華奢な身体をかき抱きたいという欲求を抑え込み、自嘲の笑みを浮かべる。

「こんな馬鹿な考えを持っていると他人に知られたら、弁護士は廃業確定だな」

美羽をこのまま一人にしたくないが、自分が傍にいるのも危険だ。

別室で彼女が起きるのを待つことにした赤坂は、立ち上がろうと膝立ちになった。

だがその直後、シャツの裾をぐいっと引かれて、視線を下に向ける。

すると薄目を開けて涙を浮かべる美羽に気付き、赤坂は慌てて彼女の顔を覗き込んだ。

「美羽ちゃん？」

苦しいのだろうか。

心配になつて優しく問いかけると、蚊の鳴くような声が聞こえてきた。

「行かないで……傍にいて」

震える声で紡がれた懇願と共に、布団から美羽の手が差し出される。

宙をさまよう小さな手を見た瞬間、赤坂はそれを握り返す以外の選択肢を失った。

「行かないよ。ずっと傍にいる」

美羽の言葉には、それまで彼女が抱えてきた寂しさ全てが込められているようだった。

ほんの少しの間でも、その寂しさを埋めることができればいい。

そう思い、赤坂はふたたび畳の上に腰を下ろす。

そして小さな手を、少しだけ力を込めて握り締めた。

第五話

「んっ」

翌朝。

いつもと変わらぬ小鳥の囀りを聞きながら、美羽はゆつくりと目を覚ました。

身体を丸めて眠っていたのだろうか。

ぐつと背を伸ばすと、とても心地よい気分だった。

しばらくの間、柔らかい毛布に頬をすり寄せ、寝返りを打とうと試みる。

だがいくら身体を反転させようとしても、まるで壁に当たっているかのように身動きが取れない。

もしかして、これが金縛りというものなのだろうか。

二十歳までに経験しなければ一生経験することはないと聞いたのに……
美羽は半分寝ぼけたまま、むにゃむにゃとつぶやく。

すると、不意に耳元でくつくつという忍び笑いが聞こえてきて、慌てて顔を上げた。

「ふえ？ お化け？」

ぼやけた視界では、そこにいるのが誰かなんてわからない。

だが徐々に視界が鮮明になっていくと、それは最近心を揺さぶられたばなしの相手に見えた。輪郭を確かめるように、美羽はそつと幻の顔に指を伸ばす。

うわぁ、リアルだなぁ。

でも、まさか夢にまで出てくるなんて。

この夢のせいで、今まで以上に彼に見られなくなったらどうしよう……

そんな懸念を抱きながら、指を頬から顎の方にゆくりと滑らせる。

途端、そこから伝わってくるちくちくとした感触に、美羽は思わず何度もさすって確かめた。

「うえ？」

指先から伝わる小さな痛みは、そこにいる人物が夢の住人ではないことを伝えていた。

目の前の現実気付いた瞬間、美羽は驚愕の声を上げる。

それと同時に、引いた手をぎゅつと掴まれてしまった。

直後、大きく見開いた目に鮮明に映ったのは正真正銘、赤坂本人だった。

「あああつ、赤坂さんっ!？」

「うん。おはよう、美羽ちゃん」

素っ頓狂な声を上げる美羽に、赤坂は爽やかな笑顔に向けた。

すると美羽はじりじりと身体を後方にずらして掛け布団の中にもぐり込み、顔を半分だけ隠す。

そして窺うように赤坂の顔を見上げた。

「あの、どうしてここに？」

この状況下にあつては、沈黙が何よりも怖い。

どぎまぎしながら、美羽はおずおずと問いかけた。

昨夜、一緒にご飯を食べに出掛けたことは覚えてる。

帰りに大雨の中を手を繋いで走り、とても幸せな気分だったことも記憶に残っている。

だが、その後のことが何も思い出せない。

それでも十中八九、自分が何か失態を犯したのだろうと予想して、美羽は頬を引きつらせた。

対する赤坂は笑みを保ったまま、その質問に答えた。

「昨夜、美羽ちゃんが玄関先で倒れちゃったから、ここまで連れてきたんだ。鍵をかけずに帰るわけにもいかないし、夜遅くに倒れた女の子を一人にするわけにもいかなかったからね。それに……」

言いながら、赤坂は自分の着ているシャツの裾に視線を向ける。

つられて美羽が視線を追うと、その一部分だけが不自然にくしゃくしゃになっていることに気付いた。

そしてすぐにその理由に思い至り、美羽は空気が抜けた風船のように身体を縮こませた。

「重ね重ね、すみません」

迷惑をかけてしまったことを恥じながら、一心に謝罪をする。

こんな迷惑女はさっさと見捨てて、帰ってくれて構わなかったのに――

そう思ったが、口に出すのはあまりに罰当たりな気がして唇を噛みしめた。

すると赤坂の大きな手が、毛布の上からぼんつと肩に乗せられた感触がした。

「謝るのはこっちの方だよ。眠っている女性の隣に潜り込んで、添い寝までしちゃったんだから」

「いえ、そんなっ。傍にいてくれて、ありがとうございます」

もしかして彼は謝罪など望んでいないのではないだろうか。

そう思い、美羽は布団から顔を覗かせて感謝の言葉を紡ぐ。

途端に赤坂の笑みが深まり、自分の選択が間違ってたことを知る。

嬉しさではにかんだ笑みを見せると、赤坂の手が不意に美羽の髪に伸びてきた。

温かな手の感触にくすぐったさと気持ちよさを感じながら、美羽は頬を赤らめた。

「ありがとう、か。そう言ってもらえて嬉しいよ。実は俺から美羽ちゃんに一つお願いがあるんだ

けど、昨夜付き添った見返りとしてお願いしてもいいかな？」

「はいっ！ 何でも言ってください！」

赤坂の言葉に被せ気味に叫ぶと、彼は小さく噴き出した。

「ダメだよ、美羽ちゃん。男に何でもなんて言っちゃ」

苦言を呈しながら、赤坂は親指の腹で美羽の唇をつつと撫でる。

至近距離で男性に、しかも懂れている相手にそんなことをされるとは思わず、美羽の頭の中は一瞬で真っ白になる。

だが赤坂が次に発した言葉に、遙か彼方にトリップしていた思考は一気に現実へと引き戻された。

「俺のお願いはね、これから美羽ちゃんの作った朝ご飯が食べたことなんだ。さすがに昨日

の食事は消化しちゃったからね」

眉尻を下げながら、赤坂はお腹をさすって見せる。

それを見た美羽は、慌てて壁掛け時計に目を向けた。

時刻はすでに午前十時を過ぎようとしている。

こんな時間まで自分を見守ってくれたのかと思うと、嬉しさ以上に申し訳なさが入り込んできた。

「えっと、ポリウムがあるもので大丈夫ですか？」

今から調理を始めるとすれば、作るのは昼食となる。

赤坂が何時から起きていたかはわからないが、起きがけに重めの食事は胃に辛いかもしれない。

でも二食分を一回で兼ねるなら、それなりのポリウムが必要はずだ。

ぐるぐると頭で考えているだけでは答えが出ないと思い、美羽は迷いつつも問いかけた。

職業柄、冷蔵庫には常に多くの食材が入っている。

メニューには多少の融通を利かせることができるはずだ。

そう思いながら返答を待つ美羽に、赤坂は即座にうなずき返した。

「うん。全然大丈夫だよ。朝からステーキでもかつ丼でも、どんとこいなタイプだから」

細身に見える赤坂から意外な言葉を聞き、美羽は目を丸くする。

それから子供のように「楽しみだな」とつぶやく赤坂を見て、美羽はくすくす声を出して笑った。そして善は急げとばかりに布団から飛び出し、階段の方へ向かって歩き出そうとしたとき――

美羽はふと自分の姿を見下ろして立ち止まり、慌てて赤坂を振り返った。

「あの、シャワーを使いますか？」

よく見れば、昨夜から着ていた服はよれよれだった。

おそらく大人ぶって施した化粧も、散々な状態だろう。

今すぐにも駆け出して、シャワーを浴びて着替えたい気持ちを美羽は必死でこらえた。

ここは客人である赤坂を優先するべきだ。

そう思って問いかけると、赤坂も布団から出て立ち上がる。

胸元をはだけさせ、乱れた前髪をかき上げるその仕草は艶を帯びているように見えた。

美羽は意識している相手のそんな姿を直視できず、思わず目を逸らしてしまう。

赤坂は美羽の気持ちを知ってか知らずか、目の前まで歩み寄ると、身を屈めてささやいた。

「ありがとう。でも、シャワーは美羽ちゃんが先に使つてよ。俺は近くのコンビニで必要な物を買ってくるから」

仕事で遅くなったときは急遽ホテルに泊ることもあるため、車に着替えは積んであるらしい。

歯ブラシなどの必需品はこれからコンビニで手に入れてくると赤坂は続けた。

言われて初めて、美羽はそれらを失念していたことに気付いた。

一人暮らしで男性が家に泊りに来るなどあるはずもなく、細やかな気遣いができなかった。

そんな自分を恥ずかしく思いながらも、赤坂がこのまま帰ると言わなかったことが嬉しくて、美

羽は元気よく言った。

「わかりました。戻つてこられるまでに、湯船にたっぷりのお湯を張っておきますね」

無邪気な笑みを返す美羽に、赤坂もまたふっと表情を崩した。

「なんか、新婚さんみたいだね」

不意に耳元でささやかれた言葉の威力はすさまじく、美羽は一瞬で全身を赤く染める。

「しっ、失礼します」

恥ずかしさに耐え切れず、美羽は慌てて調理場に向かって走り出した。

* * *

走り去る美羽の背を見送りながら、まるで好きな子をいじめる小学生のようだと、赤坂は苦笑いした。

そして床に置いていた財布を手に取りうと身を屈めたそのとき――

「いつてらっしゃい」

油断すれば、聞き逃してしまいそうなほど小さな声が聞こえた。

瞬間、赤坂は声をした方を振り向いた。

しかしすでに美羽の姿はなく、ばたばたという階段を駆け降りる足音だけが響く。

しばらく身動きできずにいた赤坂は、浴室から水音が聞こえてくる段になってようやく、手のひらで口元を押さえた。

その耳は、先程の美羽に負けず劣らず朱に染まっていた。
「やられた」

白旗を上げる代わりにそうこぼし、肩を揺らしてくつくつと喉を鳴らす。

そして壁に背を預けて天井を見上げながら、誰もいない空間に向けてほつりとつぶやいた。
「行ってきます」

噛みしめるようにそうつぶやくと、赤坂は財布を手に取り早足でコンビニに向かって歩き出した。

「お帰りなさい」

玄関のガラス戸を開くと、すぐに美羽の明るい声が出迎えてくれた。

彼女の家に着いたら、真つ先に「ただいま」と告げよう。

そうしたら美羽はまた瞳を潤ませて、可愛い表情を見せてくれるだろうか。

道中、そんなことを考えていた赤坂は、先手を打たれて持っていたビニール袋を落としそうになった。

よく見れば、シャワーを浴びたせいにか、美羽の頬は健康的なピンク色をしている。

出掛けに見たような、照れた赤い顔ではないため、先程の言葉が彼女の口から自然に出たものだ

とわかった。

「赤坂さん？」

玄関先で動かない赤坂を不思議に思ったのか、美羽は小首をかしげてにっこりと微笑んだ。

「お風呂、沸いてますよ？ 昨日、雨に濡れちゃったから、しっかり温まってくださいね。その間にご飯を作っておきますから」

言い終えると、美羽は返事を待つことなく調理場へ入っていく。

程無くして、調理場から楽しげな鼻歌が聞こえてきた。

このとき、赤坂は「無自覚の罪」というものを目の当たりにした。

普段の美羽は、赤坂の一挙手一投足に過敏すぎる反応を示す。

それなのに、今は料理を作ることに集中しているためなのか、濡れ髪を無防備にさらしながら、大人の男を翻弄する色香を放っていた。

蕾のまま、誰の目にも触れさせずにゆっくりと成長していくのを見守りたい。

だがその一方で、自分の手で花開かせてみたいとも思う。

矛盾ともいえる思慕を抱えながら、赤坂は野菜を洗い始めた美羽に背後からそっと近付いていく。そして包み込むように、小さな身体を抱き締めた。

「ほえ？ 赤坂さん?!」

突然身体を拘束され、美羽は驚いて背後を振り返る。

すると赤坂は、真ん丸の瞳が自分を映したことに満足しつつかさやいた。

「美羽ちゃん、ただいま」

甘い声で告げて美羽の髪をひと撫ですると、拘束を解いて浴室へ向かう。

背後では、美羽が「ふえ〜」と小さな悲鳴を上げて床にへたり込んでいた。

調理場が出る瞬間、赤坂は美羽の顔がリングのように真っ赤になっていることを見逃さなかった。

「彼女の反応に好意を確信して安心するなんて、大人の男のすることじゃないな」

浴室の前にたどり着くと、赤坂は自嘲気味に笑った。

第六話

「うん。やっぱり美味しい」

「ありがとうございます。必要なら、おかわりもすぐにできますから」

恒例となった賛辞に、美羽は嬉しさと瞳を輝かせる。

朝食兼昼食として、美羽が赤坂のために作った料理は親子丼とねぎま鍋だった。

多めに盛りつけたにもかかわらず、それらは瞬く間に赤坂の胃袋の中へ消えていく。

おかわりも残さずに食べ切ると、赤坂は満足げに息を吐いた。

その姿に、料理人としてこれほど嬉しいことはない、美羽は顔を綻ばせた。

食事を終えた後、美羽は赤坂を居間に案内し、調理場で手早く後片付けを済ませる。

そして淹れ立てのコーヒーを手に居間に戻ると、赤坂の対面に腰を下ろした。

コーヒーを受け取った赤坂は、居間から店内を見渡して口を開いた。

「このお店は、ずいぶん前からやっているんだね」

店の壁には、セピア色の写真が飾られている。

そこには割烹着姿の男女と、二人を取り囲むように立つ数名の男女が写っていた。

背景にあるのは、今と変わらぬこの店の外観だ。

赤坂の言葉を受けて、美羽も写真に視線を移しながらうなずいた。

「はい。おじいちゃんが二十歳になる前に始めたので、もう六十年以上になるのかな」

そう話す美羽の瞳の中には、懐かしさと寂しさが混在していた。

「おじいちゃんは私が生まれてすぐに亡くなりました。その後、小学生の頃に両親も交通事故で亡くなってしまったので、それからはおばあちゃんが親代わりになって私を育ててくれたんです」

だからこそ、遺されたこの店を少しでも長く続けていきたい。

美羽が迷いなど微塵もない凛とした声で言うと、赤坂はそっと瞳を閉じた。

次いで意を決したように目を開け、美羽の傍ににじり寄り、その身体を抱き寄せた。

「えっ？」

突然赤坂の腕に包まれ、美羽は頭の中が真っ白になる。

慌てて抜け出そうとしても、そうすればするほど抱き締める腕に力が込もった。

そのことに気付いた美羽は抵抗をやめ、気持ちを落ち着けるために深く息を吐いた。